

幕臣成瀬家一族の墓所と墓石

池上 悟

一 はじめに

江戸時代の幕藩体制のもとに本邦の各地を治めた各藩の藩主の墓所は、大名墓として史跡に指定され、整備して保護されている。北は蝦夷地の松前藩主松前家墓所から、南は薩摩藩主島津家墓所が一門六家の墓所を含めて一括して史跡に指定されている。

東北地方では、山形県新庄藩主の戸沢家墓所、米沢藩主上杉家墓所、會津藩主の松平家墓所が指定されている。関東地方では水戸徳川家の瑞龍山墓所、中部地方では長野県の松代藩主真田家墓所、高島藩主諏訪家墓所、愛知県幸田町の九州島原藩主の深溝松平家墓所、北陸地方では金沢藩主前田家の野田山墓所、近畿地方では滋賀県の清滝寺京極家墓所、彦根藩主の井伊家墓所は、地元墓所と江戸の豪徳寺を含めた指定である。また和歌山藩主徳川家墓所、和歌山藩附家老家の新宮藩

主の水野家墓所も指定されている。

中国地方では、鳥取藩主池田家墓所、松江藩主松平家墓所、津和野藩主亀井家墓所、岡山藩主池田家墓所、萩藩主毛利家墓所が指定されており、四国地方では徳島藩主蜂須賀家墓所、高松藩主松平家墓所、土佐藩主山内家墓所が指定されている。

また九州地方では対馬藩主宗家墓所、大村藩主大村家墓所、熊本藩主細川家墓所、岡藩主中川家墓所が指定されており、令和二年には薩摩藩主島津家墓所が一門六家の墓所を含めて一括指定になっている。

これら大名墓は、各藩内においては最大の配慮のもとに家臣墓とは隔絶した規模・構造で建立されており、地域支配者の墓所として認識されるものである。しかしながら、藩主に従属した家臣の墓石と総括的に検討された例は稀である。これらの中で、蝦夷地松前法幢寺などにおける藩主および家臣墓石の悉皆調査は、藩内の階層に従った墓所

構成と建立された墓石の相違を明確にしており、注目すべき成果を挙げている。^①

また彦根藩主井伊家の墓所は、彦根・清涼寺における歴代当主墓として無縫塔を建立するのに対し、江戸の菩提寺である東京都世田谷区豪徳寺墓所では各当主は夫妻ともに同規模の笠付方柱墓石を建立しており、領地と江戸の墓石の違いを明確にしている。^②

石見津和野藩主亀井家墓所は、菩提寺の曹洞宗・永明寺に対峙する乙雄山の東斜面を造成して墓所を形成しており、藩主、藩主室および子女の墓石を、身分に従って墓石型式を変えて建立している。藩主墓石には当初は尖頂方柱墓石、次いで独特な形状の位牌形墓石を独占的に採用するのに対して、藩主室の墓石には頂部が丸く三突起した方形墓石を造立している。子女墓には小形の笠付方形墓石を採用しており、その違いは明確である。

この三種の墓石の違いは、藩主分家当主墓石には藩主当主と同型式の墓石が小形化して用いられ、家老墓には藩主室墓に採用された頂部三突起方形墓石が使用されている。また家臣墓には、頂部三突起方形墓石と藩主子女墓に採用された小形の笠付方形墓石が採用されている。これらから藩内における墓石造立の規制を窺うことができるものとなっている。^③

大名墓は、史跡に指定することにより調査・整備され実態が把握され研究の進展は認められるが、藩主墓石はその位置を明確にするため

にも多くの家臣の墓石との比較が重要であることが認識される。

この視点のもとに鳥取藩池田家にあつて藩内の要衝を治めた家老墓を検討し、藩主墓石との比較を行った。各領地の墓所に造立された墓石は独自の墓石を造立する傾向が強いが、鳥取城下の菩提寺には藩主墓石に倣った墓石を造立する様相が明らかになった。^④

同様に東北の雄藩である仙台藩において、藩内の要衝を治めた藩主一門の墓所を調査して実態を把握した。仙台藩主墓所は、初代政宗の瑞鳳殿、二代忠宗の感仙殿、三代綱宗の善応殿の霊屋建立のあとに、四代綱村以降の墓は霊屋造営ではなく墓石を造立しており、経ヶ峰につづく大年寺山の無尽燈廟に大規模な円頂方形墓石を造立している。^⑤

それぞれの領地の菩提寺に造立された一門の墓石は、独自の様相を呈示しているものの、中には藩主墓石を規範としたと思える墓石を造立する場合も認められる。多くの家臣墓石の実態は不明な部分が多いものの、有力家臣家では藩主墓石を基準とした例も知られる。

また尾張藩の重臣家の墓所を対象として、造立された墓石を調査して藩主墓石との関連を確認した。尾張藩の場合には、在地に系譜を有する古い家系の墓石には伝統的墓石を造立しており、その他では独自の墓石を造立する事例が多い。また藩主墓石は隔絶した存在であり、その墓石型式を家臣の墓石としては採用してはならず、僅かに藩主墓石の一部要素を採り入れた有力家臣の墓石が確認できるものであった。^⑥

本稿では、藩主とその家臣の墓石の相関関係の把握ではなく、尾張

藩重臣墓として扱った附家老である犬山城主成瀬家を含む、幕臣成瀬家を本家とする成瀬氏一族の確認できる墓所と、そこに造立された墓石の様相について検討することを目的とする。

犬山城主である犬山成瀬家は、附家老から大名への独立を画策してきたが、維新によって宿願は果たされ犬山藩主となり、明治四年の廃藩置県により犬山藩知事になったが、同年に犬山県は名古屋県に合併され、成瀬家は男爵として華族に列した。⁷⁾

犬山成瀬家の墓所は、領地の尾張犬山、名古屋城下以外に、下総国葛飾郡、江戸・修行寺にも営まれており、総合的検討も課題とする。

二 成瀬家略歴

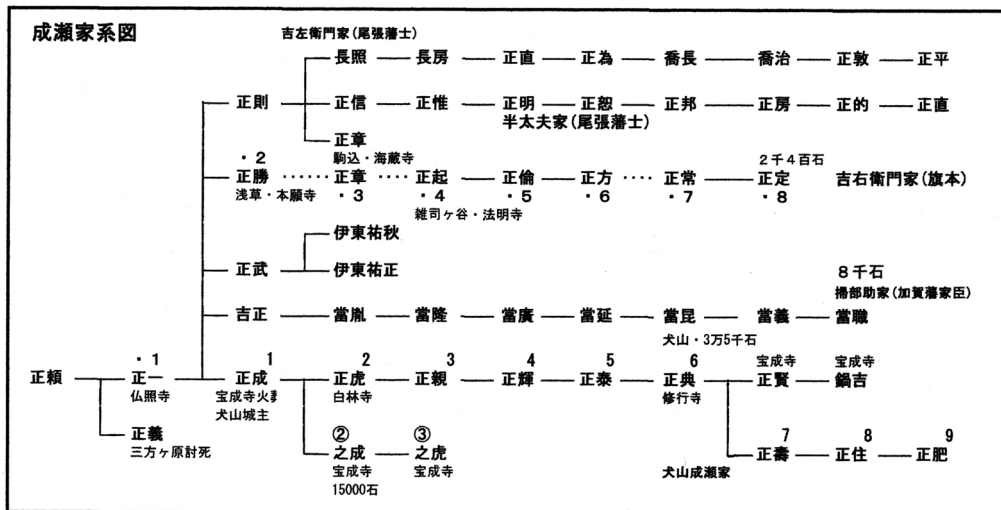
幕臣成瀬家は、松平清康とその子広忠に仕え、広忠の岡崎城奪還に功績のあった成瀬正頼を始祖としている。その子の成瀬正義は徳川家康に仕え、采地二五〇貫を賜わっている。元龜三（一五七三）年に、武田信玄の侵攻に対した遠江三方ヶ原の戦いにおいて三十八歳で討死した。正義の死によって家督は弟の成瀬正一が継いだ。

成瀬正一は武田氏、北条氏に仕えた後に家康に仕え、元龜元（一五七〇）年に浅井・朝倉軍と織田信長との間で近江浅井郡に起こった戦いである、姉川の合戦に戦功があった。その後の戦いにおいて活躍し、徳川家康の関東入部時には武蔵国榛澤、男衾、近江國坂田三郡のうちにおいて二千百石の地を賜わった。関ヶ原の戦いの後に伏見城の留守

居をつとめ、元和六（一六二〇）年に八十三歳で没し、大坂佛照寺に埋葬されている。

成瀬正一の墓所は、その後に役目で大坂を訪れた七世の子孫である成瀬正定が墓参し、既に墓碑銘が摩滅して判読できない現状を顧慮して再建された墓石の、佐藤坦の撰文による墓碑銘が知られる。「一齋成瀬君墓表」とするものである。

「因幡守成瀬君謂余曰曩者正定在職於大坂府也訪七世祖墓於府之仏照寺墓惟一没字碑草深苔厚必其惻焉今復承仕長崎往返猶獲年一展謁因不及今而表之則後世或無以徵也請子為叙述其履歷吾將勒之石以示於後余乃案家乘曰君諱正一號一齋稱吉右衛門系出自二條藤公諱良基其後有居參州成瀬郷者因氏焉至諱基直者始仕我芳樹公遂寫世臣又六傳諱正頼者有四男子伯諱正義仲乃君也兄弟並以材武聞三方原之役我帥不利伯氏遣君迎護神祖脫危急姉川長篠諸戰君皆從有功君少時寄食甲州諱武田氏軍事因每與甲接戰必令君督事及甲陷士民多歸於我蓋君有力焉甲人既歸順以平岩親吉爲郡代君及日下部定好爲奉行新布號令君乃獲武田氏軍國圖籍獻之是爲鉅功矣我之有關左也亦命君定其政令關原之役從臺德大君爲旗奉行事平擢伏見城留守兼知江州數郡元和元年特旨權守龜山城蓋欲遂以封焉君辭曰臣老矣無能爲也且臣子不肖並濫國恩常懼弗能負荷以貽累於老臣也必蒙寵賚則黃金足以養餘生矣神祖因賜黃金若干以成其志至神祖厭代君乃薙髮不復干人事以元和六年六月二十八日歿享壽八十三君有五男三女長正成爲尾藩宰次吉正仕加藩次正武別賜俸次正芳襲祿爲嗣次



第1図 成瀬家系図

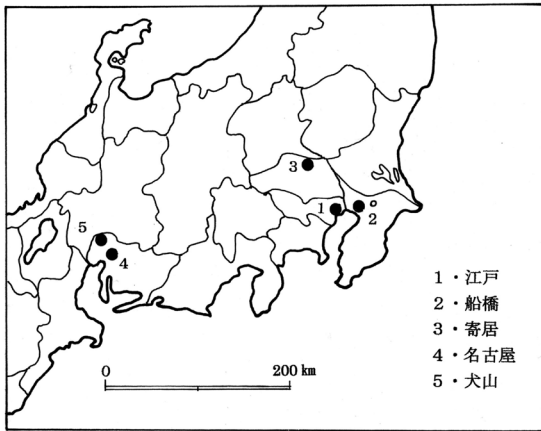
正則又仕於尾女一適日下部氏一都築氏一金丸氏余謂維昔遂鹿日尋干戈當是時佐命之勲豈乏其人然惟攻城野戰而已至一齋君文武濟美是豈易得乎且夫武弁之士爭功覬覦固其常也獨君深以盈滿爲戒知足安分以全其晚節則求之千百人中而不易得者矣其墓湮廢之久而待族今日復表見焉嗚呼此雖由於因幡君追孝無已而其不可磨滅者不在於一齋君也哉余故掇其梗概俾傳焉 文化元甲子秋八月」

の兄弟の正章は、本家の正勝の嗣子となって本家三代を継いでいる。これらの家系のうち墓所が確認できたのは、長男正成の犬山成瀬家墓所、その分家の下総栗原藩主家墓所、三男正武の墓所と、四男正勝が継いだ成瀬本家墓所である。

三 江戸周辺の墓所

(一) 江戸雑司ヶ谷・法明寺

江戸雑司ヶ谷（豊島区）の法明寺は日蓮宗寺院であり、境内に鬼子母神堂があり、雑司ヶ谷鬼子母神として知られた寺である。墓地には



第2図 成瀬家の墓所

平安時代以来の系譜を有する豊島氏の墓所のほか、御本丸老女華嶋の玉垣を巡らした墓所、その他旗本の内藤家、徳川吉宗に従って御家人に列した岡村家など多くの幕臣の墓所も遺存している。

旗本成瀬吉右衛門家墓所は、墓地のほぼ中央部に位置しており、

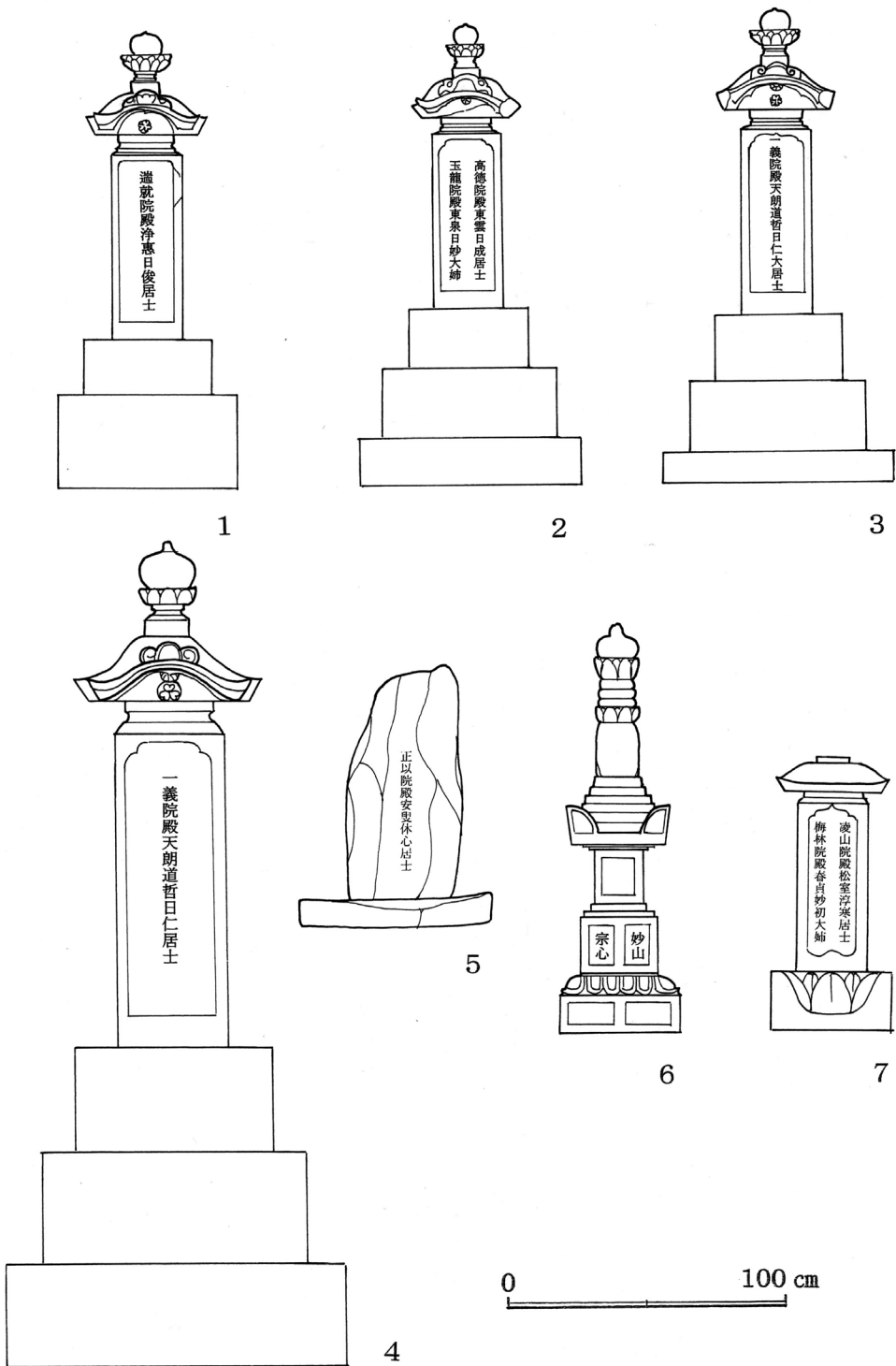
江戸時代建立の三基の笠付方柱墓石と、明治・大正期建立の平頂方形墓石四基が、三坪ほどの敷地に方形に再配置されて遺っている。

1は二段の基礎石を伴う本体幅三十六cm（二尺二寸）、笠を含めた高さ一六〇cm（五尺三寸）、総高二三五cm（七尺八寸）の笠付方柱墓石である。笠は正面に唐破風を造作した上部に大形の宝珠を伴う形状であり、正面には丸に酢漿草の家紋を表している。

本体正面には枠を残して彫り込んだ内部に、「妙法」の頭書の下に「遍就院殿浄恵日俊居士」の法名と、享保六（一七二一）年の没年を表している。側面には、「成瀬氏藤原正起墓」と刻まれている。

成瀬正起は、尾張藩家臣となった正一の五男正則の子正章が本家三代となり、その後を継いだ本家四代であり、『寛政重修諸家譜』に「松平加賀守家臣成瀬八左衛門政全が男」と確認でき、正一次男吉正の家系と思える。また元禄九年に遺跡を継ぎ、正徳三年には三百石加増されて、すべて三千四百石を知行している。後に職務怠慢により閉門となり、三年後に許されて、享保六年に四十七歳で没し、雑司ヶ谷法明寺に埋葬され、のち代々葬地としている。

3は三段の基礎石を伴う本体幅三十六cm、笠を含めた高さ一五八cm、総高二四五cm（八尺二寸）の笠付方柱墓石である。笠は正面に唐破風を造作した上部に大形の宝珠を伴う形状であり、正面には丸に酢漿草の家紋を表している。本体正面には「一義院殿従五位下前因州刺史天朗道哲日仁大居士」の法名と、文化三（一八〇六）年の没年を表して



第3図 江戸・法明寺、寄居・正芳寺、江戸・吉祥寺の成瀬家墓石

いる。側面には「成瀬因幡守藤原正定」と刻まれている。

成瀬正定は成瀬本家八代であり、六代正方の養子となった七代正常の子である。天明四年に三十四歳で遺跡を継いで采地二千四百石を領し、天明七年には西城の目付となり、寛政四年には目付となっている。八年には堺奉行となり従五位下因幡守に叙任し、九年には大坂町奉行になっている。この家系で叙任されたのは正方以前には認められず、それが故に特に墓石に明記したのかと考える。

2は三段の基礎石を伴う本体幅三十六cm、笠を含めた高さ一四八cm、総高二三七cm（七尺九寸）の笠付方柱墓石である。笠は正面に唐破風を造作した上部に宝珠を伴う形状であり、正面は損傷している。正面には「高德院殿東雲日成居士／玉瀧院殿東泉日好大姉」の夫婦の法名を表した世代墓であり、側面には天保十三（一八四二）年の没年と「成瀬藤蔵正純」、嘉永七（一八五四）年の没年と「成瀬藤蔵正純妻」を表している。さらに正面の夫妻の法名の間には、慶應四（一八六八）年に没した「正純二女」の法名を追刻している。**成瀬正純**は成瀬本家十代であり、十一代鉄太郎で維新を迎え明治十六年に没している。

以上、雑司ヶ谷法明寺の成瀬家墓所に造立された墓石は、高緑の旗本家の墓所として武士階層に普遍化している笠付方柱墓石の造立を確認できる。遺存するのは法明寺を菩提寺にした三代正起の墓石、従五位下因幡守に叙任された八代正定の墓石、幕末の十代正純の三基の墓石に限定されるものの、歴代同型式の墓石が建立されたものと想定で

き、一定の格式を保持したものと考えられる。

（二）武蔵男衾郡・正芳寺

成瀬本家吉右衛門家の墓所は領地の武蔵国男衾郡（埼玉県大里郡寄居町三品）の曹洞宗正芳寺にも営まれている。この墓所は寄居町の史跡に指定されており、説明板には平成九年の日付で以下のようにある。

「ここ正芳寺の開基は、成瀬吉右衛門正芳（正勝）であり、この墓地には正芳と七代目の子孫、正定の墓がある。正芳の父・成瀬正一は、鉢形城落城の年、天正十八（一五九〇）年八月、徳川家康の関東入国に伴い、日下部定好と共に鉢形城の警備と周辺地域の支配を命ぜられ、重要な役目を果たした。正芳は三品をはじめ父正一の領地を継ぎ、ここに成瀬家の菩提寺として禅宗曹洞派の日輝山永光院正芳寺を建てた。その後正芳は、延宝四（一六七六）年五月、七十歳で没し、浅草本願寺に葬られ、当寺にも墓が建立されている。また正芳の子孫である正定は、寛政四（一七九二）年御目付役、同八年堺奉行となり、従五位下因幡守に任ぜられ、寛政九年からは大坂町奉行という幕府の重職を務め、文化三（一八〇六）年四月、八十六歳の高齢で没した。」

すなわち男衾郡三品の正芳寺は、江戸時代初期に所領を賜った旗本が領内に開基となって菩提寺を建立する類型の一つであり、北武蔵において広範に知られるところである。日下部定好もまた隣接地の立原

の地に吉定寺を建立して菩提寺としており、寄進した梵鐘は埼玉県の指定文化財になっている。

4は高い三段の基礎石を伴った、本体幅四十cm、笠を含めた高さ二二五cm、総高三〇五cm（一丈二寸）の大形の笠付方柱墓石である。笠の正面には唐破風を造作しており、正面には丸に酢漿草の家紋を表している。本体正面には「一義院殿従五位下前因州刺史天朗道哲日仁大居士」の法名を表し、側面には文化三（一八〇六）年の没年と「成瀬因幡守藤原正定」の俗名が刻まれている。

墓石の型式と表された墓碑銘は、雑司ヶ谷法明寺に建立された墓石と同じであるが、規模が異なっている。笠を含めた本体の高さでは法明寺墓石は正芳寺墓石の七割規模であり、総高では八割規模となっている。領地建立墓石が大きく、城下の墓石が小さい建立例は多く確認されるところである。

5は地域に特徴的な緑泥片岩を使用した板状の墓石であり、一段の基礎石を伴う幅四十cm、高さ八十六cm、厚さ十八cmの不整形を呈するものであり、正面には「正秋院殿安叟休心居士」の法名が表されている。付近に「爲当山開基正秋院殿安叟休心居士供養塔」の塔婆が確認され、正芳寺開基の初代成瀬正勝の墓石と確認できる。

成瀬正勝は『寛政重修諸家譜』には「元和六年遺跡を継承。承応二年に御先鍬炮頭となる。延宝四年五月四日死す。年七十。法名休心。浅草の本願寺に葬る。」と確認できる。すなわち領地の菩提寺にも墓が

建立されたものである。

（三）江戸駒込・吉祥寺

江戸駒込の曹洞宗・吉祥寺は、太田道灌によって長祿二（一四五八）年に江戸城内に建立され、徳川家康の関東入部時に駿河台に移転し、江戸の大半を焼失した明暦三（一六五七）年の大火後に現在の雑司ヶ谷の地に移された。江戸時代には境内に学寮の梅檀林が設けられ、多くの学僧が属した。広大な境内墓地には、蝦夷地松前藩主松前家、越後新発田藩主溝口家、下野壬生藩鳥居家などの多くの藩主家に加え、十家以上の旗本家の墓所が造営されていたが、今やその多くは無縁化して荒廃している。

6・7の二基の墓石は、吉祥寺境内墓地に所在する成瀬家墓所であり、小形ながら管理されている。6は、総高一五三cm（五尺一寸）の大きさの小形の宝篋印塔である。基段の上面の反花座には二個の複弁蓮華文を表し、相輪の伏鉢の割合を大きくし九輪には三輪を表す古式な形成を示すものである。基礎上面は二段の段級を造作し、正面には「妙山宗心」の法名、側面には「元和元年十一月廿七日」の没年をあらわしている。

この墓石は、徳川秀忠に御小姓として仕え、小姓組の番頭となって五千石を知行し、京都参内に従った折の不祥事により、元和元（一六一五）年に吉祥寺で死を賜った成瀬正一の三男成瀬正武の墓石である。

7の墓石は、一段の基礎石を伴う総高一〇二cm（三尺四寸）の小形の笠付方形墓石である。正面には院殿号の居士と大姉の法名が並記されており、側面には貞享二（一六八五）年の没年を表している。

この墓石は6と同じ墓所区画に造立されていることから成瀬正武系の子孫の墓石かと思える。年代は正武の孫世代であり、正武の子祐正の子祐勝は尾張藩士となって犬山西成瀬家の祖となっており、あるいはこの家系の墓石かとも思われるが確定できない。

四 尾張の犬山成瀬家の墓所

（一）犬山・臨溪院

犬山城主の尾張藩附家老である成瀬家墓所は、臨濟宗の犬山・臨溪院と名古屋・白林寺に営まれている。犬山臨溪院は十五世紀末に創建されたが、織田信長が犬山城を攻略した折に焼失して衰退し、寛永十九（一六三二）年に二代目犬山城主の成瀬正虎が再建して成瀬家の菩提寺にしたものである。

臨溪院成瀬家墓地は、本堂横の斜面を造成して造成されており、成瀬家初代の正成から四代正幸までの四基の尖頂方形墓石が並置して造立されており、この前方に童子墓一基と昭和二十三年建立の成瀬家累代之墓が位置している。

臨溪院の初代正成の墓石（1）は、二段の基礎石の上に造立された本体幅九十二cm（三尺一寸）、高さ二二二cm（八尺七寸）、総高三三六

幕臣成瀬家一族の墓所と墓石

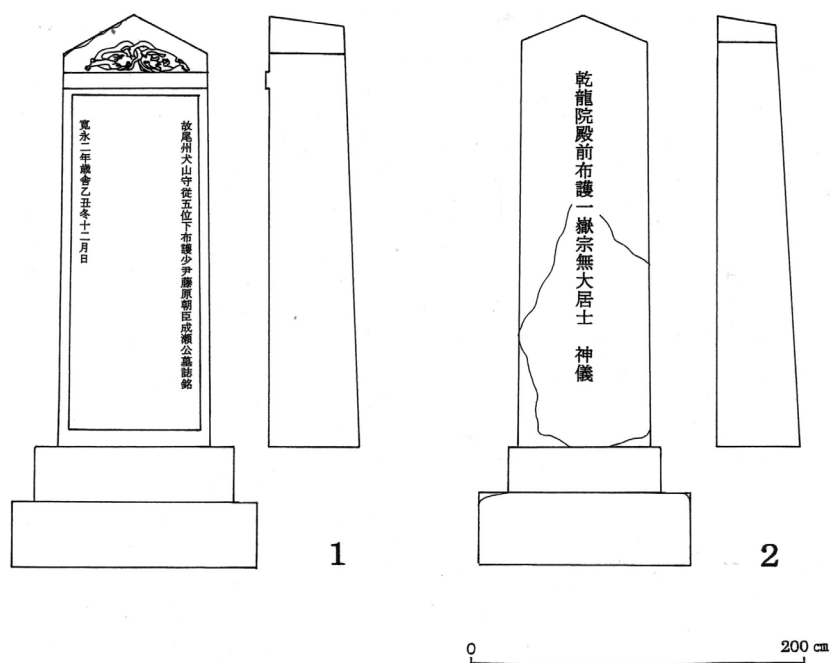
cm（二丈二尺二寸）の大きさである。墓石の厚さは五十四cm（一尺八寸）、頂部の下には幅十cmの狭い額部を造作しており、東海地方における戦国時代の墓標の系譜を継受する様相を顯示している。また額部の上の三角部分には、蟠結する双螭を彫っており、螭首方趺の漢碑の伝統を表示したものとされている。

裏面には「成瀬隼人正藤原朝臣正成」と俗名を表し、正面には「故尾州犬山守従五位下布護少尹藤原朝臣成瀬公墓誌銘」として全面に墓碑名を鐫刻している。

「故尾州犬山守従五位下布護少尹藤原朝臣成瀬公墓誌銘 尾陽路醫官法眼查庵正意誌 自古創業守成之君必得英雄俊傑之士為之輔佐贊之謀計而後一時策勲千載成名者也所以漢得肅曹韓韓而興唐得房杜王魏而興宋得曹彬趙普而興用得徐達劉基而興之數者皆股肱心膂之臣特起超邁之才而以明資明以智資智而其所好必相投所尚必相契而後致力益顯所志竟成也今 國王大樹源君藝祖 大相國崛起三州混一四海者佐謀多出於公公姓藤氏成瀬諱正成宗心其道稱也家世三州人也祖正賴以驍勇起家皇考一齋治縣有循吏名後為甲陽令生 公及四子四子皆倚 公之庇蔭而顯仕列國初 大相國在藩之日豐臣秀吉有欲併吞四海之志親擁二十萬兵屯於濃尾二州之間 大相國奮起遠州濱松城擇數千精兵屢戰屢勝殲厥渠魁塞其旆舉旗 公時年十七先登陷陳斬獲无多以軍功擢給事幄中豐臣以師勞兵□行成交質而還 大相國領東閩八州牧表乎東海從是以來風波不起民樂昇平慶長三年歲在戊戌秋八月豐臣臨薨招 大相國囑曰自今以往握

天下兵馬權由是列國侯伯唯命是謹越五年歲在庚子有事於興州 大相國親督侯伯師進次于野州小山叛臣石田氏等□蜂起西南悉靡矣東軍西軍分割於濃州關原欲以挑戰 大相國分衆留備興州即倍日并行九月乙卯日一戰而擒石田海內人安 公以智名勇略拔群先衆補泉堺吏 公到之日法制戒飾政治嚴明市不征貨路不拾遺令聞廣譽特達于 朝一增秩至布護少尹再策勲知甲陽數縣兼領前軍兵馬事于伏陽于駿府秉鈞軸贊廟謨且夫内外章草也郡國理務也侯伯之來朝蠻夷之貢獻乃至民間訟關縣吏會計無不興聞辯決焉我 黃門幼而岐嶷慈仁忠良 大相國鍾愛日厚既而就尾陽於茅土封令 公為傳矣夫尾之為州也東接三州西帶濃河北隣信山南隔伊水所謂四塞之地而要衝之都會也越庚戌之春 大相國命列國牧伯築那古屋城石壁塹濠不日以成令我 黃門守之以蕃 王室然而天生孝順不背就國晨昏不怠定省左右遣 公巡察郡縣施之政教越甲寅之秋難波兵起姦相庸將招集凶命者推理者流寓者數萬人保棲于堅城以塞西州之要津 大相國大樹率數十萬之衆環而攻之士卒暴露於野三月意謂不以一城易萬人之命遂成城下盟而阨其池崩其隅示天下不復用兵矣明年歲在乙卯難波兵亦起輕點烏合之衆凡二十萬人角力拒戰 大相國 大樹悉家衆大擧命 公及安藤直次節制諸將總齋軍政四方戮力夏五月癸丑日金城湯池一炬焦土翌日甲寅凱歌而還京師是行也 公之所以籌策者居多傑然為開國宗臣也由之觀之有創業之君而必有輔佐之臣漢唐宋明之所以興者如此而 大相國之所以興者亦如此有守成之君繼述而必有廟謨之臣贊揚漢唐宋明之所以傳數十世承數百歲者亦如此而 大相國之所以繼繼承承於千萬年者亦復

如此可謂盛矣越明年歲在丙辰春正月 大相國俄爾臥病遂以四月十七日薨于正寢喪畢而後各就國明年歲在丁巳我 黃門巡觀國境田野闢矣民人給矣因是嘉 公有勲勞而能利邦家者封以大山并食數十縣別賜 膏腴田為湯沐邑 公常侍那城進盡至誠退思撫循宮無留事門無滯士竟永元年歲在甲子冬十月不幸罹病弥留危篤曾我 黃門述職于江府 公輿病而往告執事大倉令利勝曰託孤之命不渝報國之忠不忘而令而後知免夫執事把手涕泣曰特以聞 國王哀其將死地與我 黃門詢僉于國醫及方技之士診治萬方遂以明年歲在乙丑正月十七日卒于江府享年五十有九矣遺命曰瘞骨于野州日光山 東照大權現廟傍一片石書曰 成瀬氏某之墓云 國王聞訃昔輟朝三日我 黃門臨喪慟哭哀禮咸申天下之知與不知無不聞之歎惜焉令嗣正虎幹父盡慎終之日請於大僧正天海建碑云嗚呼自古至今君臣遭逢以同日生以同日死或王公於國郡或封侯於縣邑自非交際相契智謀符合則何以如此哉 公有二子一女兄正虎繼 考封為尾陽老而不愧前烈弟之成勤仕 國王為前軍從事掌鳥統一女往今京兆尹板倉重宗生數子矣孫女皆嫁于貴豪家可謂有是父而有是子矣我 黃門慕德不已相攸于那城南為輶一字曰白林寺屈於喝堂上人令供香火別封民戶數十家復其徭役以備四時之祭奠矣令嗣正虎囑予誌其顛末予雖不當任久沐恩德日間聲歎甄拔於行伍之間親炙於是食之暇因不能固辭略述其所見所聞矣是皆輿人之所謂而非予之私論也銘曰 雲龍協起水魚相資維君維臣為傳為師揆亂反正乾坤夷吊民伐罪父恬武漚幽韜秘略吳正孫奇百萬驍雄盡屬指麾守成垂繞肅規曹隨億兆黎庶普蒙恩施天監厥德以福弥丕人慎乃職百工允贊振興儒



第4図 臨溪院の成瀬家墓石

教是訓是彝鑒開禪心得髓得皮和 樂既翕燕翼所貽依仁遊藝仲填伯篋飛
英騰茂子葉孫枝噫 公偉績載在口碑於我何哉傳之万斯 寛永二年歲舍
乙丑冬十二月日從五位下隼人正藤原朝臣成瀬正虎立之」

二代正虎は文祿三（一五九四）年に生まれ、秀忠の小姓とした仕えた後に義直に仕えて名古屋に入った。寛永二年に家督を継ぎ、寛文三（一六六三）年に七十歳で没した。墓所は白林寺に営まれた。二代正虎の墓石（2）は、二段の基礎石の上に造立された尖頂方形墓石であり、本体幅八十cm（二尺七寸）、高さ二六二cm（八尺七寸）、総高三三四cm（二丈一尺一寸）の大きさである。形状は初代正成の墓石に等しいが、上部の図紋と突帯の造作は消失している。正面には「乾龍院殿前布護一嶽宗無居士 神儀」の法名、側面には寛文三（一六六三）年の没年を表している。

並置して造立されている三代正親、四代正幸の墓石は、二代正虎の墓石と同規模、同型式であり、正面に法名、裏面に官位俗名を表している。

三代成瀬正親墓石の正面には「柏貞院殿節功良忠居士」の法名、裏面には「從五位下隼人正藤原朝臣成瀬正親」の官職俗名と元禄十六（一七〇三）年の没年を表している。

四代成瀬正幸墓石の正面には「随峯院殿實相轉幽居士」の法名、裏面に「從五位下隼人正藤原朝臣成瀬正幸」の官職俗名と、寛保三（一七四三）年の没年を表している。

童子墓石は、二段の基礎石上に造立された高さ七尺規模の尖頂方形墓石である。正面に「俊篤院殿英嚴幻雄童子」、裏面に「成瀬熊之助藤原朝臣正紀」の俗名と享保二十（一七三五）の没年を表している。この墓石は犬山成瀬家の長男の幼名熊之助と没年から五代成瀬正泰の長男の墓石と判断される。六代は正泰次男の正典が継いでいる。

昭和二十三年に建立された成瀬家累代之墓も他の墓石と同じく尖頂方形墓石を採用しており、高さは六尺規模であり、犬山成瀬家十一代の国文学者であった成瀬正勝による建立と確認できる。

この犬山成瀬家墓所と離れた臨溪院墓地内に、成瀬別家の墓所が営まれている。江戸時代の墓石は一基が認められるのみであるが、二段の基礎石を伴った高さ六尺規模の尖頂方形墓石である。正面には「正燈院殿慈雲玄定居士」の法名、裏面に享保九（一七二四）年の没年と「従五位下土佐守成瀬朝臣□□」と確認できるものの、系譜を確定できない。隣接して同じく尖頂方形墓石を採用した昭和二十五年の成瀬家墓石が建立されており、この家系は廃藩後にも継続して昭和に至ったことが確認できる。

（二）名古屋・白林寺

名古屋城下の臨濟宗白林寺は、寛永二（一六二五）年に尾張藩初代藩主徳川義直が附家老成瀬正成のために建立した寺院であり、成瀬家の菩提寺となった。墓地は、他の市内寺院墓地とともに戦後名古屋北

方の平和公園に移設されており、成瀬家墓所も移設され墓石は再配置されている。成瀬家墓地は、尾根頂部を占める白林寺墓地の上部に二段に配置されており、奥側に初代から四代、前側に五代以降の墓石を配置して合計十二基が造立されている。いずれの墓石も花崗岩を用いた基壇の上に基礎石を伴う墓石本体を造立しており、墓石本体の石材は安山岩を用いたものである。長年月の歴史を反映して、多くの墓石は破損した部分が認められる。

初代正成の尖頂方形墓石（1）は、上部の動物文と突帯の造作、全面に墓碑銘を鐫刻する様相は、犬山・臨溪院例に等しい。本体幅九十二cm（三尺一寸）、高さ二四六cm（八尺二寸）の規模は、犬山例よりは高さにおいて五寸小さい。上部に置いて半折しており、正面の墓碑銘は判読できない部分も多いものの、ほぼ犬山例と等しいものである。

裏面には大きく「成瀬隼人正藤原朝臣正成」と刻み、この下に「日往月亦遷九十有一年／碑銘名古屋蘇銘文施不合／正徳龍乙未時惟初秋天／擇教多有司正幸新建焉」と確認できる。すなわち正成没後九十一年の正徳二（一七一五）の四代正幸の時に、墓碑銘が不鮮明になった為に建て直したことが確認でき、これが故の犬山例との規模の差異となったものかと思える。この墓碑銘は戦前に報告されており、内容は臨溪院墓石に等しい。¹⁰⁾

二代以降の墓石は、尖頂方形墓石として同型式であり、本体下幅は九十二cm（三尺一寸）としく、高さは二九二cm（九尺七寸）から三〇

第1表 白林寺墓地の成瀬家墓石一覧

| 番号 | 年号 | | 幅 | 高さ | 総高 | | |
|----|------|-------|------|-------|-------|------|-----------|
| 1 | 寛永2 | 1625年 | 90cm | 258cm | 348cm | 初代正成 | 螭首方趺 |
| 2 | 寛文3 | 1663 | 92 | 292 | 344 | 2代正虎 | |
| 3 | 元禄16 | 1703 | 92 | 306 | 358 | 3代正親 | |
| 4 | 寛保3 | 1743 | 92 | 300 | 356 | 4代正幸 | |
| 5 | 天明5 | 1785 | 92 | 298 | 358 | 5代正泰 | |
| 6 | 文政3 | 1820 | 92 | 294 | 356 | 6代正典 | |
| 7 | 寛政10 | 1798 | 84 | 278 | 340 | 成瀬正賢 | 6代嫡子 |
| 8 | 寛永11 | 1634 | 92 | 296 | 358 | 成瀬之成 | 下総栗原藩2代藩主 |
| 9 | 天保9 | 1838 | 92 | 294 | 350 | 7代正壽 | |
| 10 | 安政4 | 1857 | 92 | 288 | 356 | 8代正住 | |
| 11 | 明治36 | 1903 | 92 | 304 | 368 | 9代正肥 | |

四cm（一丈一寸）の変容を示している。墓石正面にはすべて法名を刻むものであるが、官職・俗名と没年を表す場所に年代的変遷を確認できる。四代までは裏面、五代、六代、七代では官職・俗名は正面で没年は裏面に表し、八代、九代は裏面に表している。

二代正虎の墓石（2）は、本体幅九十二cm（三尺一寸）、高さ二九二cm（九尺七寸）であり、犬山例より一回り大きい。正面に「乾龍院殿式岳宗无大居士」の法名、裏面には「従五位下隼人正藤原朝臣成瀬正虎」と表している。

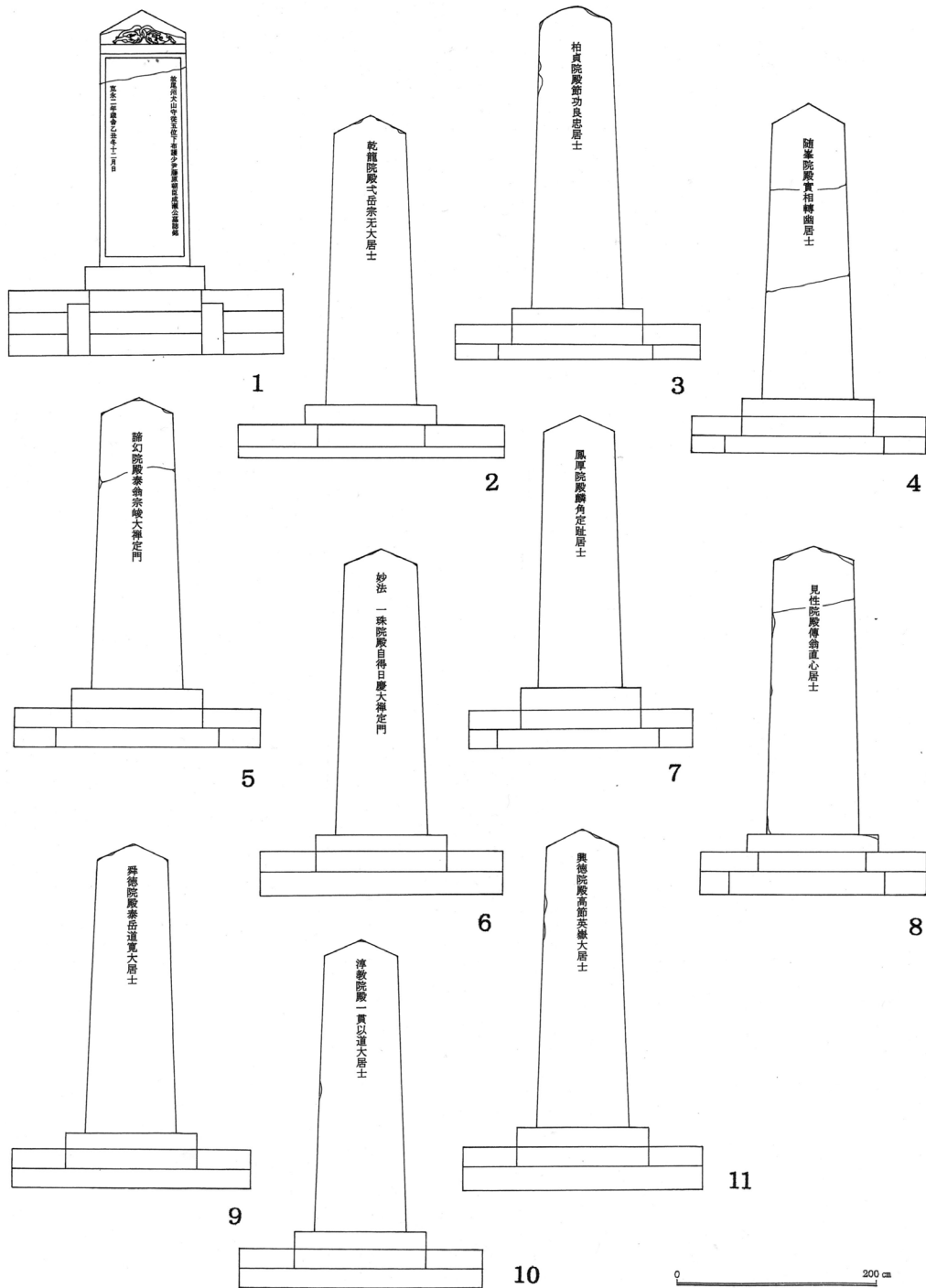
三代正親は二代正虎の長男として生まれ、万治二年

に家督を継いで五千石の加増で三万五千石を領知し、元禄十六（一七〇三）年に六十五歳で没した。三代正親の墓石（3）は、本体高さ三〇六cm（一丈二寸）の大きさであり、正面に「柏貞院殿節功良忠居士」の法名、裏面には「従五位下隼人正藤原朝臣成瀬正親」の官職俗名と没年を表している。

四代正幸は三代正親の長男に生まれ、元禄十六年の正親の没後に家督を継ぎ、寛保三（一七四三）年に六十四歳で没した。四代正幸の墓石（4）は、本体高さ三〇〇cm（一丈）の大きさであり、上部で半折している。正面に「随峯院殿實相轉幽居士」の法名、裏面に「従五位下隼人正藤原朝臣成瀬正幸」の官職俗名と没年を表している。

五代正泰は四代正幸の長男として生まれ、享保十七（一七三二）年に家督を継ぎ、天明五（一七八五）年に七十七歳で没した。五代正泰の墓石（5）は本体高さ二九八cm（一丈）であり、上部で半折している。正面に「諦幻院殿泰翁宗俊大禅定門」の法名、「前犬山城主従五位下少府監藤原朝臣成瀬正泰」の官職・俗名を表し、裏面には天明五年の没年を表している。

五代正泰の墓誌は確認されていないが、墓誌銘は知られる。「尾張邦那姑射城南白林禅寺南側塋域方十弓是國相犬山城主従五位下朝散大夫成瀬君諱正泰之兆也君之先出自従一位太政大臣二條藤公諱良基其孫世居參州加茂郡成瀬郷遂氏焉君之高祖諱正成神祖之時以武功食邑總州栗原四千餘石進叙従五位下朝散大夫稱隼人正慶長八年癸卯拜知政事加邑



第5図 白林寺墓地の成瀬家墓石

二萬石於甲一萬於參其入合三萬四千餘石十五年庚戌神祖命相我敬公爲
犬山城主因改邑尾濃之間三萬五千石君曾祖考諱正虎祖考正親考諱正幸
世襲爵邑爲國相考之内子姓堀氏先卒側室竹中氏以寶永六年己丑六月二
十九日生君于尾享保二年丁酉君年甫九歲初見我晃禪公十三年戊申君年
二十初東觀兩宮十七年壬子考老君襲年二十四亦稱隼人正爲人質直好武
其奉上臨下儼然勵翼歷事我四公執政三十六年朝野敬憚之明和五年春君
年六十告老致仕改稱内藏頭天明五年乙巳六月二十日疾卒享年七十七矣
有二男二女長子諱正純早卒次子隼人正正典嗣焉女一適四條三位藤君隆
叙一夭云以卒之月二十八日側葬于此 本国侍講明倫堂督學細井德民謹
誌¹¹⁾

六代正典は五代正泰の二男として生まれ、明和五（一七六八）年に
家督を継ぎ、文政三（一八二〇）年に七十六歳で没している。六代正
典の墓石（6）は本体高さ二九四cm（九尺八寸）であり、正面上部に
「妙法」の頭書を刻んでいる。これは法華の信者であったが故に、他の
当主墓石とは異なったものとなっており、法名も法華宗に特有の院殿
日号を採用している。正面に「一珠院殿自得日慶大禪定門」の法名、
「犬山前城主従五位下藤原朝臣成瀬正典」の官職・俗名を表し、裏面に
没年を表している。

六代正典は日蓮宗・修行寺に埋葬された。御府内の市谷の地にあつ
た修行寺は、大正元年に現在地の杉並区に移転している。移転に伴つ
て改葬された際に墓誌が出土している。墓誌は一辺五十四cm（一尺八

寸）の正方形を呈する合わせ蓋式のものであり、五輪塔型式の墓石に
合わせて展覧されている。

七代正壽は六代正典の四男として生まれ、文化六（一八〇九）年に
家督を継ぎ、天保九（一八三八）年に五十七歳で没している。七代正
壽の墓石（9）は、本体高さ二九四cm（九尺八寸）であり、正面に「舜
徳院殿泰岳道寛大居士」の法名、「犬山前城主従五位下隼人正藤原朝臣
成瀬正壽」の官職・俗名を表し、裏面に没年を表している。七代正壽
は、先祖ゆかりの下総栗原の地の曹洞宗・寶成寺に埋葬された。昭和
四十四年の改葬時に墓誌が発見されている。

八代正住は、七代正壽の長男として生まれ、天保九年の七代の没後
に家督を継ぎ、安政四（一八五七）年に四十六歳で没している。八代
正住の墓石（10）は、本体高さ二九八cm（一丈）であり、正面に「淳
教院殿一貫以道大居士」の法名、裏面に「従五位下隼人正藤原朝臣成
瀬正住」の官職・俗名と没年を表している。

九代正肥は、丹波篠山藩主青山忠良の三男として生まれ、八代正壽
の娘の婿養子として家督を継いだ。幕末の動乱期に朝廷を守護して独
立大名として認められ、犬山藩知事もつとめ、子爵となり明治三十六
（一九〇三）年に六十八歳で没した。九代正肥の墓石（11）は、時代の
変遷にも係わらず先代墓石と同型式であり、本体高さは三〇四cm（一
丈一寸）である。正面に「興徳院殿高節英嶽大居士」の法名、裏面に
「正三位勲三等子爵成瀬正肥」の俗名と没年を表している。この墓石型

式は成瀬家の特徴として、昭和二十五年に十一代成瀬正勝によって造立された「成瀬家累代之墓」にも踏襲されている。

移転された白林寺墓地には、成瀬家の歴代当主のほかに二基の墓石が造立されている。(7)の墓石は六代正典の嫡子で、寛政十(一七九八)年に三十九歳で没した成瀬正賢の墓石である。墓石は同型式ではあるが、歴代当主ではないために、か、本体幅、高さともに一割ほど小さく造られている。正面に「鳳厚院殿麟角定趾居士」の法名、裏面に「信濃守従五位下藤原朝臣正賢」の官職・俗名と没年を表している。

(8)の墓石は下総栗原藩の二代藩主であった、成瀬之成の墓石である。下総栗原藩は、徳川氏関東入部に際して成瀬正成が栗原の地に四千石を賜わり、関ヶ原の戦いの戦功により三万四千石の大名になったことにより立藩された。正成が尾張に移った後、二代は次男の之成が一万五千石を領知した。之成は寛永十一(一六三四)年に没し後を三代之虎が継いだ。寛永十五(一六三八)年に五歳で早世し、栗原藩は無嗣断絶で改易となっている。

成瀬之成の墓石は他と同型式、本体高さは二九六cm(九尺九寸)と同規模であり、上部で半折している。正面に「見性院殿傳翁直心居士」の法名、裏面に「従五位下伊豆守藤原朝臣成瀬之成」の官職・俗名と没年を表している。また本体裏面の下部には「平野宇平次、青木左源太、藤村仁左衛門」の殉死した三人の名前を刻んでいる。

以上の成瀬家墓石に窺われる様相は、初代の墓石に東海地域に伝統

的な墓石型式を採用し、二代目以降は変容するものの同型式の墓石を継続して造立する点である。この墓石型式は成瀬家特有のものであり、各地の大名家に固定した墓石型式の様相に通じる様相である。

五 江戸・下総の犬山成瀬家墓所

(一) 下総栗原・宝成寺

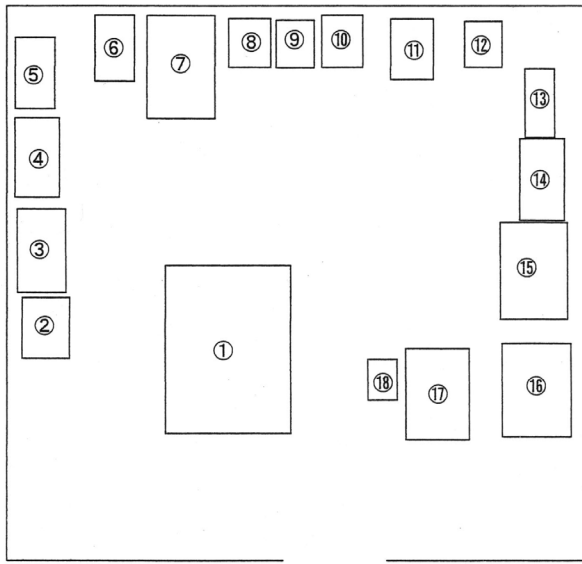
曹洞宗茂春山宝成寺は、千葉県船橋市西船に所在する。この地の旧葛飾町一帯はかつて栗原郷と呼ばれ、江戸時代初期に栗原藩主であった成瀬氏の領地であった。宝成寺の開山は大本山總持寺開祖常済大師十三世法孫の月溪智泉大和尚、草創開基は葛西六郎茂春、法名は茂春宗繁居士である。創建年代は不詳であるが、天正年間の一五〇〇年代後期とされ、成瀬氏の菩提寺となっている。

徳川家康の天正十八(一五九〇)年の関東入部に際して、成瀬正成は下総国葛飾郡栗原郷において知行四千石余を賜った。栗原八か村(本郷村、寺内村、古作村、印内村、小栗原村、二子村、山野村、西海神村)が領地となり、領内にあった法城寺を菩提所と定め、城の字を成瀬の成字に、法の字を宝字に替えたため今の宝成寺の名になった。

成瀬正成は徳川家康の側近の一人であり、関が原の役においても軍功があり、堺奉行などの職を歴任し、三万四千石を給されて大名に列した。家康の子義直が尾張徳川家を創設すると、その附家老として後見役に任ぜられ、元和三(一六一七)年には尾張犬山城主となった。

正成は寛永二（一六二五）年に江戸で没し、栗原本郷の菩提寺宝成寺で荼毘に付され、後に徳川家康を祀る日光に改葬された。正成の死後、尾張藩附家老としての犬山城主は長男正虎が継いだ。栗原藩は正成が犬山城主となった際に、次男の之成に下総国内と河内国内の一万余石を分与しており、之成自身の武蔵国内の領地千石を合わせて、成瀬之成は栗原藩一万五千石の二代藩主となった。

しかし、之成が寛永十一（一六三四）年に三十九歳で没したため、わずかに一歳の之虎が跡を継いだ。之虎も四年後の寛永十五年に五歳



第6図 宝成寺の成瀬家墓所

幕臣成瀬家一族の墓所と墓石

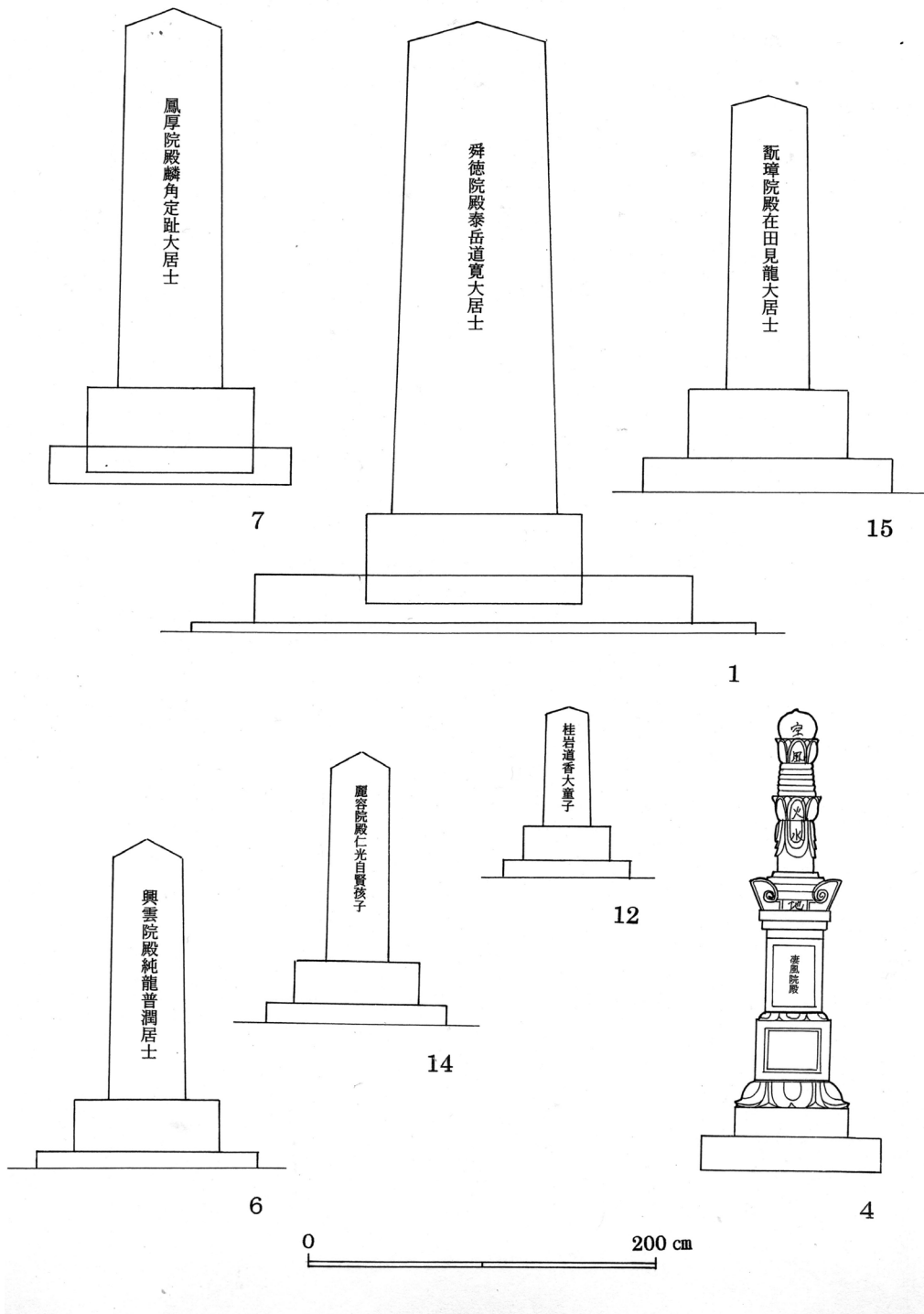
で夭折し、栗原藩成瀬家は断絶した。一方、犬山の成瀬家はその後も続き、明治時代には子爵になっている。

宝成寺は、江戸における犬山成瀬家の菩提寺とされ、栗原藩断絶後も成瀬一族の墓が営まれ、明治九年までの墓石が残されている。

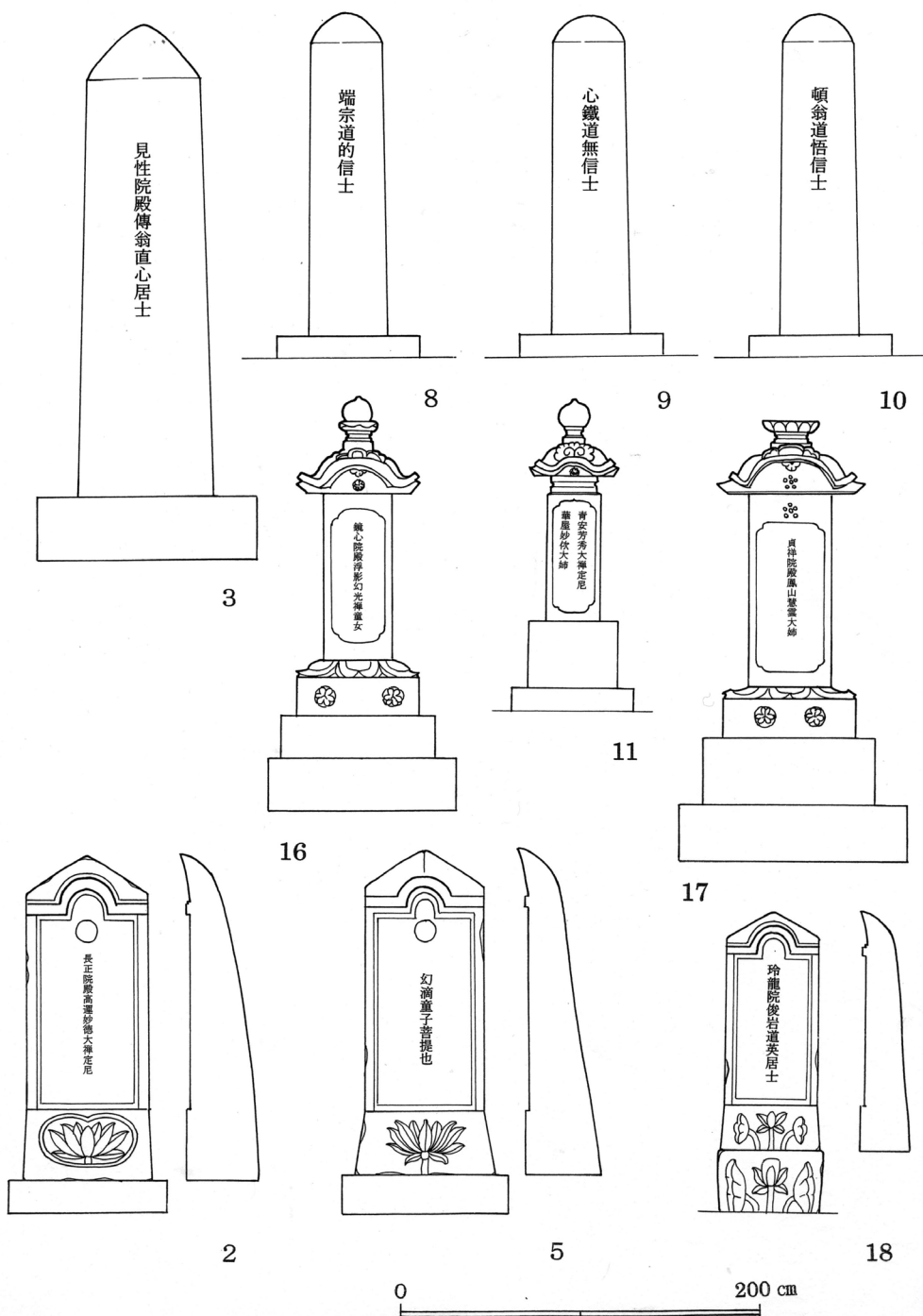
1は、犬山七代城主の成瀬正壽の墓石である。二段の基礎石の上に造立された本体幅九十六cm（三尺二寸）、高さ二八六cm（九尺五寸）、厚さ四十五cm（一尺五寸）、総高三五六cm（二丈一尺九寸）の大きさである。基礎石の一段目の正面は、二段目の基礎石の幅で奥行三十cm（一尺）ほどが彫り窪められている。

本体は頂部の尖った尖頂方形墓石であり、表面には「犬山前城主従五位下／舜徳院殿泰岳道寛大居士／隼人正藤原朝臣正壽」、裏面には天保九（一八三八）年の没年が表されている。

七代成瀬正壽の墓所からは、改葬に伴って墓誌が出土しており、宝成寺に保存されている。「朝散大夫成瀬侯之墓 従五位下朝散大夫犬山城主姓藤原氏成瀬諱正壽俗稱隼人正世々尾之附庸人爲輔相考淨翁入道諱正典之第五子嫡母松平丹波守光慈之女而生母家臣松岡氏天明二年十二月廿三日生于江戸麹里之邸寛政十年戊午冬年甫十七謁見 尾之明公十一年六月始出仕十二月奉謁幕府大公二十八考致仕繼立娶大久保山城守忠喜之女有一女俱先歿以尾張臣堀和氏爲側室有三子長子正住今見奉職焉次子茂正季女某在家今茲天保九年戊戌冬十月廿七日以病卒享年五十有七越十一月七日葬于下總州葛飾郡栗原郷寶成寺先塋之側」



第7図 宝成寺の成瀬家墓石（1）



第8図 宝成寺の成瀬家墓石（2）

すなわち七代正壽は、六代正典の第五子として家臣松岡氏女を母として天明二年に江戸に生れ、二十八歳で家督を継ぎ、天保九年に五十七歳で没して栗原宝成寺に埋葬されている。

2は大山二代城主正虎の娘で、板倉重大の妻となった女性の墓石である。一段の基礎石の上に造立された、本体幅七十二cm（二尺四寸）、高さ一八一cm（六尺）の大きさの尖頭舟形墓石である。上部の半円形は突出造形であり、基礎部には蓮弁を陽出している。正面には月輪の下に「長生院殿高運妙徳大禪定尼」の法名と、明暦二（一六五六）年の没年を表している。

板倉重大は、板倉宗家初代で京都所司代などをつとめた板倉勝重の四男であり、家光の小姓となり累遷して六千石を知行し、貞享三（一六八六）年に六十九歳で没している。『寛政重修諸家譜』には「妻は尾張の家老成瀬隼人正正虎が女、後妻は水戸家の臣宇都宮弥三郎義綱が女」とある。

3は、下総栗原藩初代で大山城初代城主となった正成の次男で、栗原藩二代藩主となった成瀬之成の墓石である。一段の基礎石の上に造立された本体幅七十六cm（二尺五寸）、高さ二六六cm（八尺九寸）、厚さ四十二cm（一尺四寸）、総高三〇二cm（一丈）の尖頂方形墓石である。正面には「見性院殿傳翁直心居士」の法名、裏面には「寛永十一年甲戌／從五位下伊豆守藤原朝臣成瀬之成墓／十月二十八日／殉死三人／平野宇平次／青木左源太／藤村仁左衛門」と、寛永十一（一六三

四）年の没年と殉死者三名の俗名が刻まれている。

4は、唯一の宝篋印塔である。一段の基礎石の上に造立された総高二六八cm（八尺九寸）の大きさであり、相輪の裝飾が華麗になる以前の型式である。墓碑銘は「凄風院殿月窓正桂大禪定尼淑霊」であり、寛永拾壹（一六三四）年の没年を表している。この墓石は、二代之成の後妻である片桐且元の女の墓塔である。

5は、寛永十五（一六三八）年に没した、三代之虎の墓石である。本体幅七十八cm（二尺六寸）、高さ一八〇cm（六尺）の尖頂舟形墓石である。本体正面には「祖師西来意爲幻滴童子菩提也」と表し、下広がり基礎部には浮線表現の蓮華文を表している。幼年で三代藩主を継いだものの五歳で没した故の尖頂舟形墓石の採用と判断できる。

6は、文政六（一八二三）年に没した、大山七代正壽の兄正賢の子の鍋吉の墓石である。二段の基礎石の上に造立された、総高一九〇cm（六尺三寸）の尖頂方形墓石である。正面には「興雲院殿純龍普潤居士」の法名、裏面には「成瀬鍋吉藤原壽承」の俗名を表している。この墓からも改葬に伴って墓誌が出土しており、宝成寺に保存されている。「成瀬鍋吉藤原壽承以文政六年癸未二月十九日卒于東都享年二十七矣法號興雲院殿純龍普潤居士廿一日葬之寶成寺以隣于其父信濃守正賢之墓」である。すなわち文政六年に二十七歳で江戸に没し、父信濃守正賢之墓の隣に埋葬されたことが確認できる。

7は、大山七代正壽の兄正賢の墓石であり、寛政十（一八〇三）年

の没年である。二段の基礎石の上に造立された、本体高さ二二〇cm、総高二七八cm（九尺三寸）の尖頂方形墓石であり、一段目の基礎石の正面は二段目基礎石の幅にあわせて彫り窪められており、1の墓石に通じる様相である。正面には「鳳厚院殿麟角定趾大居士」の法名、裏面には「成瀬信濃守藤原正賢」の俗名を表している。

成瀬正賢の墓石は、名古屋白林寺墓地にも同型式の墓石建立されている。本体の高さは二七八cmであり、宝成寺墓石より大きい。

8・9・10は、二代之成に殉死した三名の墓石であり、同規模・同型式の墓石である。一段の基礎石の上に造立された本体幅四十四cm（一尺五寸）、高さ一八二cm（六尺一寸）、厚さ三十八cm（一尺三寸）の大きさの頂部が円い円頂方柱墓石である。

8は正面に「端宗道の信士」、裏面には「青木佐源太」、9は正面に「心鐵道無信士」、裏面に「平野宇平治」、10は正面に「頓翁道悟信士」、裏面に「藤村仁左衛門」の俗名を刻んでいる。

11は、二段の基礎石を伴う総高一七七cmの笠付方柱墓石である。屋根の正面には唐破風を造作し、上部には大きめの宝珠を乗せている。正面には「林鐘院殿青安芳秀大禪定尼」と、「寶林院殿華屋妙依大姉」の法名を表している。

林鐘院は慶長三（一五九八）年に没した正成の前妻であり、寶林院は元和九（一六二三）年に没した犬山二代正虎の妻である。後代の再建塔と思われる。

12は明治期の子女墓であり、二段の基礎を伴う総高一〇〇cmの小形の尖頂方形墓石である。正面には「自證院殿桂岩道香大童子」、裏面には「正五位成瀬正肥四男成瀬千尋母者天野氏明治九年四月生於東京之邸同年九月廿日卒」の墓碑銘が確認できる。

13は、明治三十六（一九〇三）年に没した、犬山九代正肥の遺髪碑である。明治二年に犬山藩知事になり華族制度下で男爵、次いで子爵になっている。

14は、文政七（一八二四）年に没した、犬山七代正壽の子の墓石である。二段の基礎石を伴う総高一五八cmの尖頂方形墓石であり、正面に「麗容院殿仁光自賢孩子」の法名、裏面に没年を刻んでいる。

15は、天保七（一八三六）年に没した、犬山八代正住の子の墓石である。二段の基礎石を伴う総高二三〇cmの尖頂方形墓石であり、正面に「翫璋院殿在田見龍大居士」の法名、裏面に没年を刻んでいる。

16は、文化五（一八〇六）年に没した、犬山七代正壽の娘である萬亀の墓石である。三段の基礎石を伴う総高二三五cm（七尺八寸）の笠付方柱墓石であり、三段目の基礎石正面には対の酢漿草の家紋を表している。笠正面には唐破風を造作しており、正面にも家紋を表している。正面の法名は「鏡心院殿浮影幻光大禪定童女」である。

17は、明和八（一七七二）年に没した犬山六代正典妻の墓石である。三段の基礎石を伴う笠付方柱墓石であり、笠上の宝珠を欠いている。総高二五〇cmの大きさであり、三段目の基礎石の正面には対の酢漿草

の家紋を表し、本体上部と唐破風を造作した笠の正面には六星の家紋を表している。正面に表された法名は「貞祥院殿鳳山慧雲大姉」である。六代正典の妻は、信州松本藩二代藩主の戸田光輝の娘であり、六星の家紋は戸田家の家紋である。

18は、基礎石を伴う尖頂舟形墓石であり、総高一六九cmを測る。裾広がりの基礎部には一華二葉の蓮華文を陽出し、上部の半円形は突帯表現である。基礎石正面の蓮華文は本体基礎部と同巧である。正面には「玲龍院俊岩道莫居士」の法名と「岩上氏友重墓」の俗名、明暦元（一六五五）年の没年を表している。

以上、下総栗原宝成寺の成瀬家墓所に窺われる様相は、栗原藩藩主家の墓所として造営され、確実なところは寛永十一（一六三四）年の栗原二代之成の墓石造立を最古としている。この墓石に先行する紀年銘を有する墓石も存在するものの、再建塔であり確実ではない。

継続して栗原三代の墓石（一六三八年）が造立され、栗原藩断絶に伴って暫らく間隙があり、明和八（一七七二）年の犬山六代正典妻の墓石造立によって犬山成瀬家の墓所としての利用が再開され、明治期に及んでいる。

この墓所に確認できる墓石の様相は、歴代男子墓石に限って頂部の尖った尖頂方形墓石が造立されており、犬山七代正壽の墓石で総高三六cm、栗原二代之成の墓石で総高三〇二cm、犬山七代正壽兄の正賢の墓石の墓石で総高二七六cmであり、正賢子の鍋吉の墓石で総高一九

〇cm、犬山八代正住の子の墓石で総高三三〇cmであり、一族内の立場の違いを明確にしている。犬山成瀬家に特有の墓石型式として、伝統を継受して明治期に及ぶ特徴を明示している。

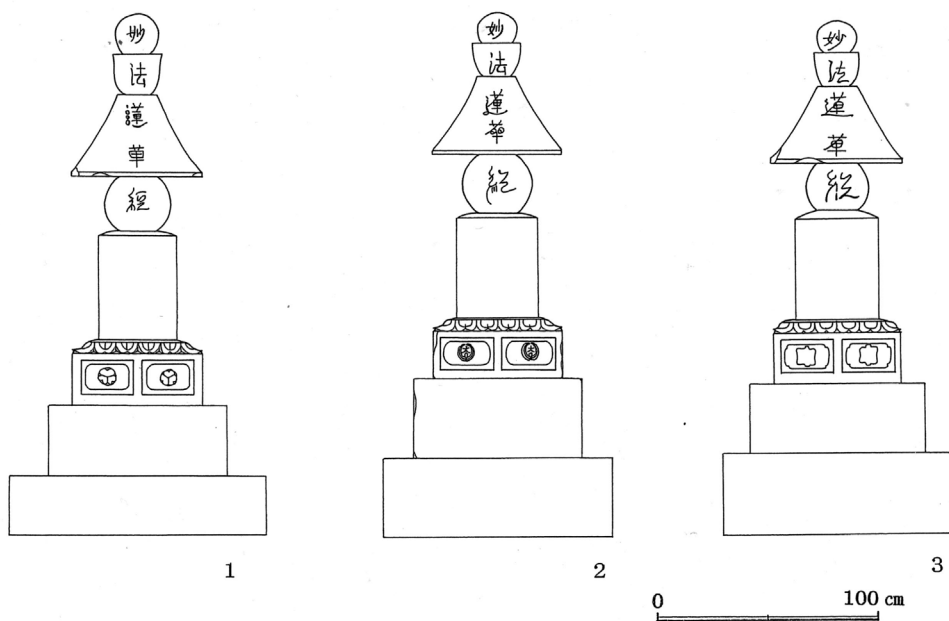
（二）江戸市ヶ谷・（杉並区）修行寺

東京都杉並区所在の日蓮宗・修行寺には、犬山成瀬家の墓所が造営されている。日蓮宗修行寺は、寛永三（一六二六）年に平賀本土寺の末寺として江戸麹町に開創され、寛永十一年に赤坂一ツ木に移転し、明暦の大火後に市ヶ谷町に移り、大正元（一九一二）年に現在地に移転している。

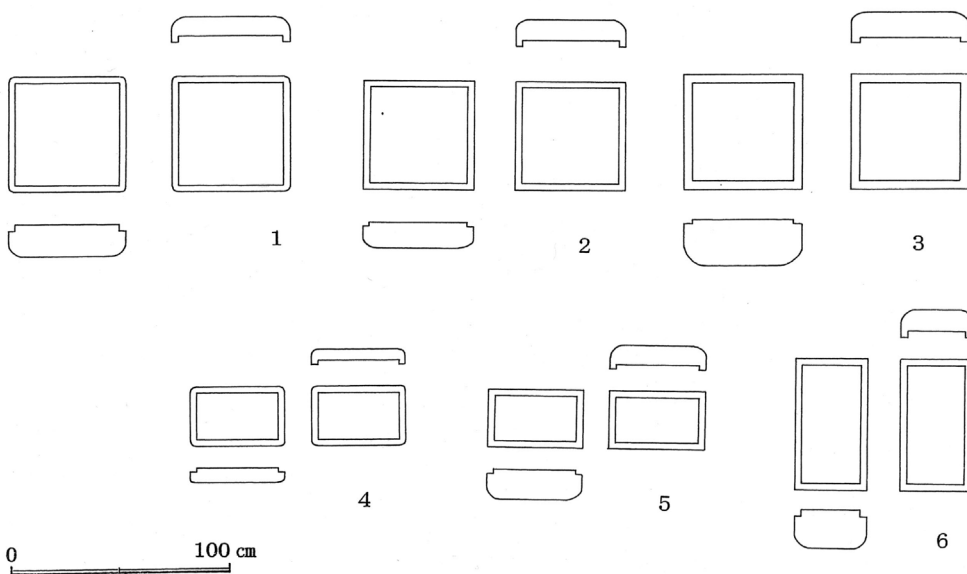
寺院移転に伴って移設された犬山成瀬家関連の墓石は三基の五輪塔であり、それぞれに伴った三点の墓誌と、この他に三点の子女の墓誌が墓所に展覧されている。²⁾

1は、文政三（一八二〇）年に七十九歳で没した犬山六代正典の墓石であり、三段の基礎石を伴う総高二四二cm（八尺一寸）の五輪塔である。火輪は高く軒が極端に薄い形状、地輪は縦長の特徴的な形状であり、空・風・火・水輪に大きく五字の題目を表している。三段目の基礎石正面は二区に分けて酢漿草の家紋を表し、上部には中四個の蓮弁の反花座を造作している。

地輪正面には「一珠院殿自得日慶大禪定門」の法名、側面には「尾張國犬山前城主成瀬左衛門尉從五位下藤原正典入道」の官職と俗名を



修行寺の成瀬家墓石



第9図 修行寺の成瀬家墓誌

表している。

五輪塔の脇に展覧されている墓誌は、一辺五十四cm（一尺八寸）四方の合わせ蓋式であり、蓋の裏面に「朝散大夫成瀬君之墓」と表している。身には十八行にわたり墓誌名が刻まれている。

「尾張國相犬山城主朝散大夫成瀬君諱正典其先出自從一位大政大臣二條藤公諱良基君五世祖諱正成神祖時以功叙從五位下稱隼人正後為執政慶長十五年庚戌神祖命相我 敬公以為犬山城主賜食邑三万五千石自茲世世襲爵為國相考諱正泰其側室山岡氏以寛保二年壬戌正月三日生君于尾寶曆元年辛未初見我 戴公六年丙子謁惇信大君及元子八年戊寅叙從五位下稱民部少輔十二年壬子 公命與參政事賜祿三千石明和五年戊子考老君襲改稱隼人正歷事我 三公執政四十餘年進退以忠副國具瞻文化六年己巳告老號淨翁賜米三千苞 今公立尚幼君夙夜在君輔翼最力焉當其致仕 幕府特命慰其勞云文政三年庚辰十月十八日病卒于江戸享年七十九矣是月二十五日葬于市谷修行寺君之嗣隼人正正壽今見為國相 本國明倫堂教授林維禎」

すなわち、成瀬正典は五代正泰の子として母の側室山岡氏との間に寛保二年に生れ、尾張藩三代の執政として四十餘年尽力し、文政三年に江戸において七十九歳で没して、市谷修行寺に埋葬されている。

2は、天保三（一八三二）年に没した犬山七代正壽夫人の墓石であり、1と同巧の五輪塔である。総高は二四四cmであり、三段目基礎石の正面には対で「上り藤に大文字」の家紋を表している。地輪正面に

は「延壽院殿貞操妙榮日賢大姉」の法名、側面には「成瀬正壽君室墓」と表している。

墓誌は一辺五十一cm（一尺七寸）の矩形の合わせ蓋式であり、厚さは二十四cm（八寸）である。墓誌名は「尾張犬山城主成瀬隼人正藤原政壽君之夫人大久保氏諱嘉津父鳥山侯山城守藤原忠喜母佐倉侯堀田相模守紀正亮女實側室某氏所生以天明四年甲辰夏四月朔生於江戸下谷三線渠邸文化元年甲子春二月三日來嫁生一女先天天保三年壬辰夏六月十三日巳刻病卒享年四十九葬於市谷谷町如説山修行寺中法諡曰延壽院殿貞操妙榮日賢大姉」である。

すなわち正壽夫人は、下野烏山藩三万石の藩主の大久保忠喜と側室との間に天明四年に江戸に生れた嘉津であり、文化元年に正壽に嫁ぎ一女をもうけるも夭折し、天保三年に四十九歳で没して修行寺に埋葬されている。

3は、安政五（一八五八）年に没した、犬山八代正住の夫人の墓石である。総高二三八cm（七尺九寸）の五輪塔であり、基礎石三段目の正面には軍配団扇の家紋を対で表し、地輪正面には「教操院殿妙貞日誠大姉」の法名を表している。

墓誌は一辺五十四cm（一尺八寸）の矩形の合わせ蓋式であり、厚さは三十四cmである。墓誌名は「尾張國犬山城主從五位下行隼人正藤原朝臣成瀬正住之夫人奥平氏諱錫中津侯從四位下行侍從兼左衛門尉源昌高朝臣第十七女側室富木氏所生也以文政四年辛巳三月十六日生於江戸

木挽街邸年甫十五來嫁生一男一女共先天養二子今見犬山侯正肥及正肥之夫人也三十有七鬱其配薙髮稱教操院今茲安政五年戊午正月十日病卒于麴街邸享年三十有八矣越十八日葬于市谷如説山修行寺」である。

すなわち正住夫人は、文政四年に中津藩十萬石五代藩主の奥平昌高の子として側室富木氏との間に江戸で生まれ、十五歳で正住に嫁ぎ一男一女をもうけるも共に夭折し、安政五年に三十八歳で没して修行寺に埋葬されている。

墓誌4は、犬山七代正壽の子女の墓誌である。横四十三cm（一尺四寸）、縦二十八cm（九寸）の大きさの合わせ蓋式である。墓誌銘は八行で刻まれており、「維文政九年丙戌二月廿三日從五位下行隼人正藤原朝臣正壽末女志津天矣側室堀和氏所生也廿五日葬之于市谷修行寺法號芳顔院殿妙艶日清大童女」である。

すなわち七代正壽と側室堀和氏との間に生れた末女の志津が、文政九（一八二六）年に没し、修行寺に埋葬されたことが判る。

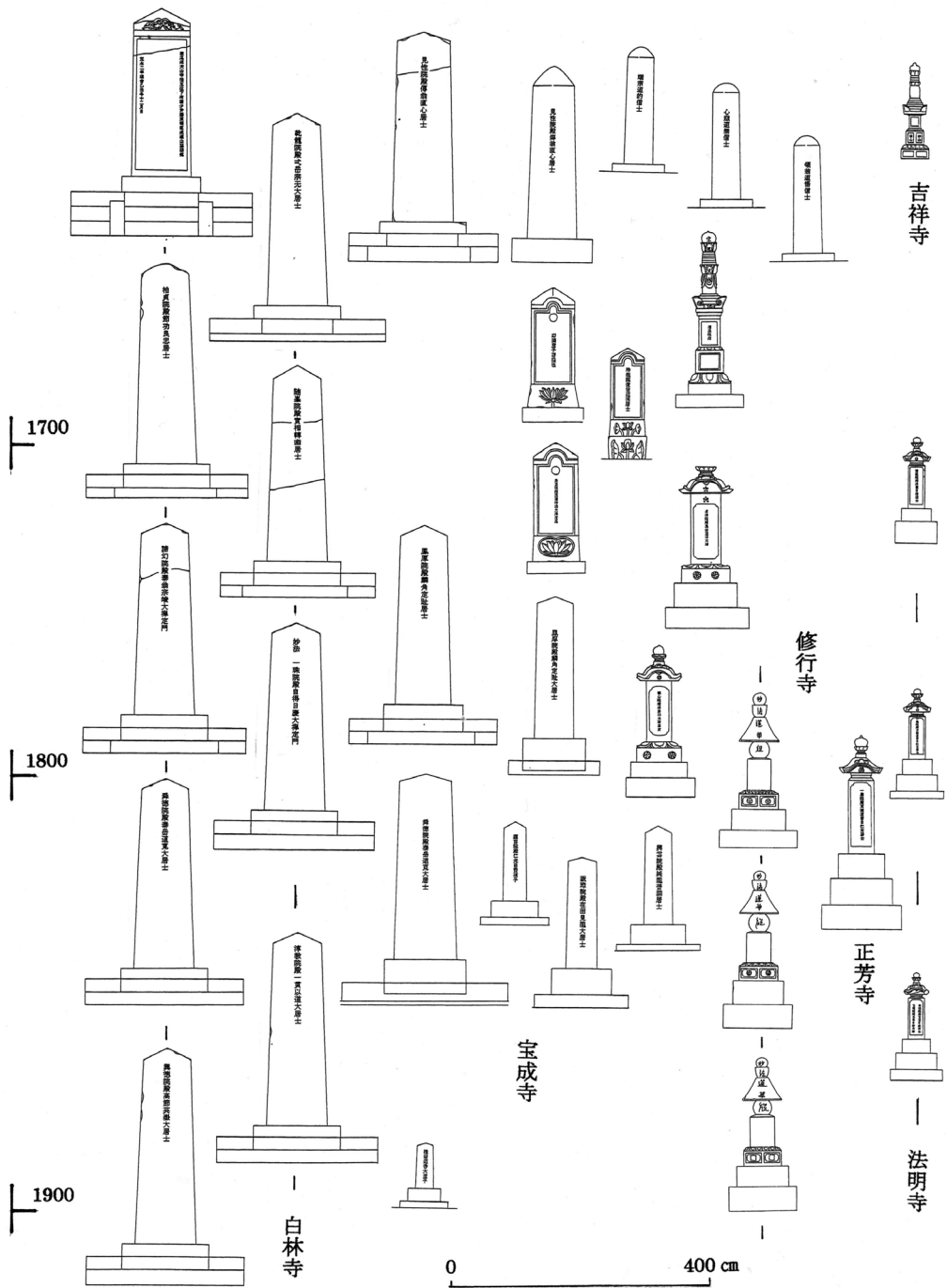
墓誌5は、犬山八代正住の子女の墓誌である。横四十四cm（一尺五寸）、縦二十七cm（九寸）の合わせ蓋式であり、墓誌名は九行に刻まれており、「維嘉永元年戊申五月十六日從五位下行隼人正藤原朝臣正住末女鏖大矣側室家臣天野氏所生也十八日葬于市谷修行寺法號玉光院殿妙恵日幻大童女」である。すなわち正住末女鏖大は、八代正住と側室天野氏との間に生れ、嘉永元（一八四八）年に没して修行寺に埋葬されている。

墓誌6は、犬山九代正肥の子女の墓誌である。横三十三cm（一尺一寸）、縦六十一cm（二尺）の縦長の合わせ蓋式であり、墓誌名は六行で「女公子諱津成瀬氏犬山侯從五位下隼人正正肥之嫡女母淳教公之長女以文久紀元辛酉五月七日生于江戸麴街邸明年四月九日嬰病而殤齡僅二歲嗚呼痛夫釋氏諡曰瓊皎院殿妙孺日律大嬰女越十八日葬于市谷如説山修行寺」である。

すなわち正肥の嫡女として正室との間に文久元（一八六一）年に江戸に生れ、翌年に二歳で没して修行寺に埋葬されている。

以上、日蓮宗の修行寺墓石に窺われる様相は、独特の特徴を有する八尺規模の五輪塔の造立であり、成瀬家の他の墓所には確認できないところである。改葬に伴って出土した六代の墓誌の存在が確認でき、当主および当主夫人の墓誌は墓誌の基本に従った一尺七寸八寸規模の矩形を呈する合わせ蓋式である。これに対して子女の墓誌は横長ないしは縦長の形状として異なっている。

本来修行寺に埋葬された犬山成瀬家関連の人数は不明であるが、現状では文政三（一八二〇）年に没した犬山六代正典の墓石建立が端緒と確認できる。犬山歴代城主では唯一の、正典の法華信仰に基づくところであろうか。また子女の墓誌も女性に限られており、下総栗原・宝成寺の歴代子女墓が男性を基本とする点においても異なっている。



第10図 成瀬家墓石の編年



第11図 日光の功臣墓

六 まとめ

以上に、現在確認できる幕臣成瀬一族の墓所に遺存する墓石の様相を確認したところである。雑司ヶ谷・法明寺に造営された本家成瀬家墓所には、家禄二千四百石の高禄旗本に相応しい二―三段の基礎石を伴う唐破風屋根付方柱墓石を造立している。

この様相に対し別家の犬山成瀬家墓所では、尾張藩附家老家の三万五千石の犬山城主として一丈規模の頂部の尖った尖頂方形墓石を継続造立しており、この墓石が下総栗原藩主墓所である宝成寺墓所の墓石も規定している。

犬山臨溪院および名古屋白林寺墓地に造立された犬山初代成瀬正成の墓石は、上部に額を造作して上部に蟠結する双螭を彫っており、螭首方趺の漢碑の伝統を表示したものとされるものであり、尾張藩重臣の瀧川家墓所にも造立されている。

名古屋城下の臨濟宗大林寺の瀧川家墓所の初代法忠の墓石は、成瀬正成墓石と同じく上部に額を造作し、この上に蟠結する双螭を彫った螭首方趺の形状であり、表面全面に墓碑銘を刻んでいる。さらに瀧川家墓石では、二代以降の墓石も上部に額を造作した尖頂方形の形状を維持しており、独特の特徴となっている。この形状は、尾張藩創設当初の重臣に採用された墓石型式と思われ、本体規模は成瀬家墓石の一丈規模に対して瀧川家墓石は七―八尺規模である。⁽¹³⁾

大山成瀬家の墓石として採用された墓石型式は、別の視点での検討も可能である。下野日光の輪王寺釈迦堂境内には三代將軍徳川家光に殉じて歿した殉死者の墓石五基と、諸功臣墓十九基が建立されている。¹³⁾

このうち家康・秀忠・家光の三代の將軍に特のほか関わりの深い功臣の墓石は、寛永十三（一六三六）年に奥院にあつた諸功臣の墓石を奥院下に移し、承応二（一六五三）年に釈迦堂西側の殉死者墓後に再配置したものである。

家光殉死者の墓石五基は一基の無縫塔を除いて、高さ一丈ないしは一丈二尺規模の頂部の尖った尖頂方形墓石であり、表面は上部を花頭形として前面を彫り窪めて、梵字種子の下に法名を表し、下端には蓮華文を陰刻するものである。

この墓石型式は、広く東海地方西部の伊勢湾沿岸地域に前代の系譜を有して江戸時代初期に定型した型式であり、尾張藩重臣では美濃可児郡に所在する幕下御付属衆の千村家墓所、尾張海西郡に所在する尾張衆の横井家墓所、美濃羽島郡に所在する八神毛利家墓所などの在地に系譜を有する家の墓石に採用されている。

この様相に対して諸功臣墓は、表面を平坦とした尖頂方形墓石で統一されている。規模は一丈ないしは一丈二尺規模が主体をなし、一丈五寸ないしは一尺規模の墓石も五基確認できる。

諸功臣墓十六基は、津藩主の藤堂高虎の三十二万四千石を最大として、家禄六百石の鷹場支配の旗本までを含んでおり、旗本級はやや小

形の墓石を採用している。

ここに造立された尾張藩附家老の成瀬正成の墓石は、本体高さ三七七cm（一丈一尺九寸）、上幅六十八cm、下幅七十六cm（二尺五寸の）大きさであり、臨溪院および白林寺に造立された墓石よりは大きい。尖頂方形墓石の正面上部には、ア・バン・ウーの梵字種子を刻み、この下に「白林院直指宗心居士」の法名、裏面には「成瀬隼人正成／寛永二乙丑年正月十七日」の没年を刻んでいる。

諸功臣墓のうち最古の没年を確認できるのは、幕下御付属衆として尾張藩の寺部で一万六千石を領した渡辺守綱の元和六（一六二〇）年である。次いで寛永元（一六二四）年の京都所司代をつとめた板倉勝重、成瀬正成は寛永二年正月の逝去であり、同年末には古河藩主の永井忠勝も没している。

従って再建墓石でない限り、諸功臣墓石としての尖頂方形墓石の採用は、元和年間の渡辺守綱の墓石に起源するものと考えられよう。この墓石型式は、日光では年代的に逆転するものの、江戸時代初期に東海地方西部で定型化して家光殉死者の墓石に採用された墓石型式の簡便化したものと位置づけられる。

渡辺家墓所は三河高部の守綱寺に造営されており、浄土真宗の門徒として特異な低平方柱墓石を造立しており、功臣墓石型式との関連は見いだせない。

板倉勝重の墓所は、三河幡豆郡の曹洞宗長圓寺に造営されており、

墓石には頂部の尖った尖頂方形墓石を採用している。墓石の表面は上部を水平として彫り込んでおり、全体の墓石形状においては功臣墓石との関連も窺われる。

成瀬家に定型した墓石は、表面を平坦に仕上げる尖頂方形墓石であり、功臣墓石との型式的関連も想起されるところである。犬山成瀬家墓所では、この尖頂方形墓石を家独自の墓石型式として歴代継続造立しており、被供養者の家族内の立場を反映して墓石規模に厳格な差異も設けている点が確認されるところである。

本稿を草するにあたっては、埼玉県文化財審議委員会委員で立正大学文学部非常勤講師の井上尚明氏、立正考古同窓の埼玉県寄居町教育委員会の澤口和正氏、池上本門寺霊宝殿学芸員の本間岳人氏のほかに、池田奈緒子氏、大塚香里氏などの諸氏に助力を賜った。記して感謝する次第であります。

註

- (1) 関根達人編『松前の墓石から見た近世日本』平成二十四年
- (2) 世田谷区教育委員会『彦根藩主豪徳寺井伊家墓所調査報告書』平成二十四年
- (3) 津和野町教育委員会『津和野藩主亀井家墓所』平成二十三年
池上 悟「津和野藩主亀井家墓所における墓標の様相」『考古学論究』第十八号 平成二十八年
池上 悟「永明寺墓地における近世墓石の特徴」『永明寺調査報告書』津和野町教育委員会

- (4) 池上 悟「鳥取藩池田家家老墓の様相」『立正大学文学部研究紀要』第三十五号 平成三十一年
- (5) 池上 悟「仙台藩の家臣墓」『立正大学大学院紀要』第三十六号 令和二年
- (6) 池上 悟「東日本における近世墓石の調査・7」尾張藩の有力家臣墓」 令和二年
- (7) 小山譽城『徳川御三家付家老の研究』平成十二年
- (8) 五弓雪窓『事実文編』第一 昭和五十四年
- (9) 池上 悟「東日本における近世墓石の調査・2」(旗本墓所) 立正大学仏教考古学基金助成研究報告
- (10) 田中善一「成瀬正成墓誌銘」『尾張の遺跡と遺物』第四号 昭和十四年
- (11) 亀山聿三編「平洲細井先生碑文集」『近代先哲碑文集』第二十六集 昭和四十六年
- (12) 大給海眞「犬山城主成瀬正典公と江戸修行寺」 令和二年
- (13) 池上 悟「東日本における墓石の調査・7」尾張藩家臣の墓石」 令和二年
- (14) 大川 清編「家光公殉死者墓調査報告書」日光山輪王寺 平成十一年
- (15) 三重県教育委員会『三重県の石造物・Ⅱ』(南伊勢地域) 平成二十五年